



第15号

編集発行／碧南市

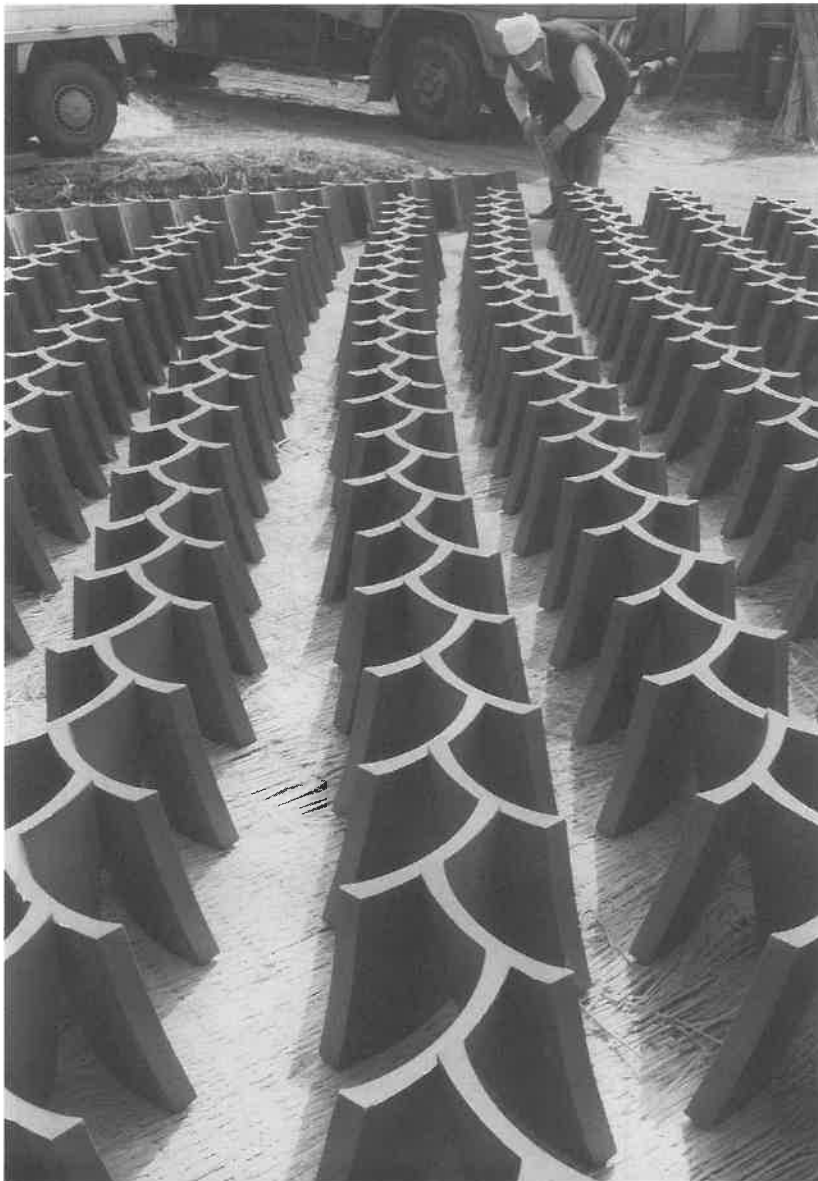
哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761



瓦の天日干し風景（昭和56年）

## 瞑想回廊第十七回企画展示

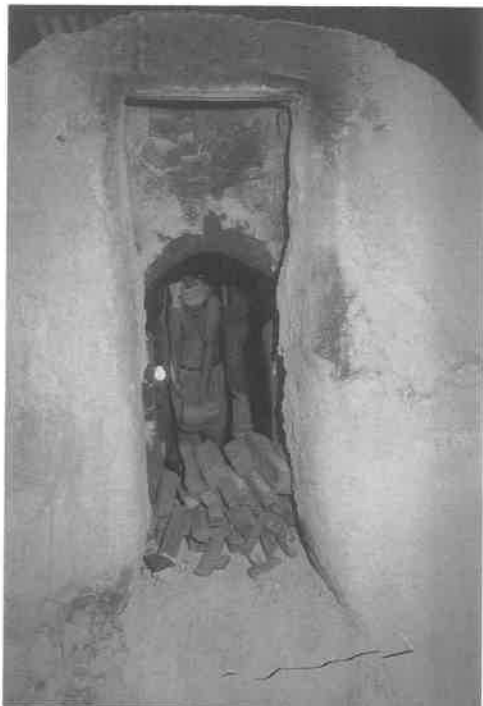
# 「土と炎 — 三州瓦のあゆみ」

平成十三年十月十七日(水)～十二月十六日(日)

私たちの生活のなかには、身近にあるがゆえに気をつけて見ていないものが少なくありません。たとえば屋根に葺かれた瓦もそういったものの一つではないでしょうか。〈瓦〉を様々な角度から見ると、瓦には百済から日本に伝来した歴史があり、時代による形、種類、質の変化があり、昔からの瓦職人の技術が刻まれています。土から成る瓦は大地から生まれて人の暮らしを包み込み、風や光、空気を語る豊かな表情を見せています。瓦が手仕事によってつくられていた時代、人の手によって粘土が掘られ、成形、乾かし、窯で数日焼かれました。しかし昭和三十年代からの生産形態の変化が瓦職人を不要としました。子どもの頃、屋根に上がって遊んだ記憶—ありふれた瓦に、たくさんのことがつまっています。

### 三州のダルマだるま窯

職人が手仕事で瓦を作っていた時代、「窯は愛知県の基準がある」と言われていました。窯—ここで言うダルマ窯は外観が座禅を組んだダルマに似ていることからその名称がつけられたと言われています。ダルマ窯による瓦焼きは1000度以上の高温で長時間焼くことが構造上不可能であったため、窯焚きの最後に松葉を詰めて燻す、「いぶし瓦」を作ってきました。通常3日間焼きつづけ、その間、職人は火の調整で窯につきっきりであり、焼きは瓦の出来不出来が決まる責任の重いかつ重労働でした。ダルマ窯がいつごろからのものかははっきりと分かりませんが、ダルマ窯の構造を備えている桃山時代の遺構があります。



ダルマ窯で作業する人

### 東本願寺瓦

1864年（元治元年）、京都の東本願寺が災禍にあいました。瓦には三河の粘土が最適であるということから、三河真宗門徒の力によって矢作川沿いの碧海郡古新田で6年をかけて28万8000枚の寺瓦が寄進されました。三河の瓦職人は延36万人であったといわれ、この時の監督は西尾市順海町唯法寺住職占部観順、職工長、今川村の永井房造、瓦師棟梁が碧南市新川町の佐藤庄蔵、瓦師副棟梁が水野由太郎でした。（大野亨子）

写真撮影 河原時夫氏（碧南市）

※右は昭和27年頃、三州瓦の産地碧南高浜地方でうたわれた「三州瓦音頭」と「ねんどぶし」

<p>一、私しや三州高浜育ち 燃える窯火に身をこがす サテ、誰にみせよと紅よそおって 明日は都へおこし入れ 〃サアサ ヨイヨイ三州瓦を そらどんとどんと作り出せ 焼き出せ 積み出せ 送り出せ (以下繰り返し)</p>	<p>二、主が自慢の仕上げの胸に みがきかゝった玉の肌 サテ、焼きも上々窯出しすれば 冴は見事な銀いぶし</p>	<p>三州瓦音頭 作詞 神谷やすし 作曲 三陽 公一 編曲 川崎 三郎 唄 豆 千代 藤島 恒夫 三陽 公一</p>
<p>四、おもて一面ひろげて干した 瓦素地に陽がそゞぎや サテ、波も静かな衣ヶ浦へ 窯の煙も影うつす</p>	<p>二、碧南よいとこ窯業の都 お国自慢の物ばかり サテ、艶も明るい色付け瓦 ふいて文化を誇るらん</p>	<p>ねんどぶし 作詞 岡田 福治 作曲 三陽 公一 編曲 川崎 三郎 唄 豆 千代</p>
<p>一、松の緑に明るく映ゆる 三州特産屋根瓦 今日もキラキラ銀の色 〃粘土、粘土、ネリヤネリヤ 粘土節 (以下繰り返し)</p>	<p>三、碧ルの上から眺める街に 文化瓦の品のよき ほんとに美しく色のよき</p>	<p>二、白い窓に程よく似合う 丘のお家は赤瓦 チョイト振り向くよい住居</p>

## 瞑想回廊第17回企画展示

# 「土と炎 — 三州瓦のあゆみ」

平成13年10月17日(水)~12月16日(日)

### 仏教文化と瓦

日本で初めて瓦が作られたのは飛鳥時代、崇峻（すしゅん）天皇の元年、すなわち西暦588年のことでした。日本書紀（720年頃の書）によると朝鮮の百済から4人の瓦作り職人が渡来し、奈良・飛鳥の造営に際し製瓦技術を伝えたとされています。仏教寺院の建築によって日本に初めて最新技術を駆使した屋根瓦が現れたことは、仏教文化と瓦との強いつながりを意味するものと考えられ、もっと言えば日本が仏教国であり、仏教によって統治されていった国であることの証のように受け取れます。

軒丸瓦と軒平瓦の二つの瓦の正面部分を「瓦当」と言いますが、飛鳥時代の瓦当文様は蓮花文、すなわち蓮華の花です。インドで興った仏教では蓮華の花を全ての生命の根源とし、仏も蓮華から生まれ出たとしています。仏像の立つ台座を見ると、蓮華座になっています。仏教のシンボルとも言える蓮の花の瓦当文様は時代の変遷によって変化していきます。

### 鬼瓦

鬼面瓦が日本に初めて登場したのは鎌倉時代（1192—1333）の中期です。乱世を鬼の力で駆逐したいという発想があったのですが、のちに鬼面瓦は鬼といっても鬼の造形でないものが生み出されていきました。家内円満、悪疫退散、防火の願いを託した造形表現に形を変えていきました。



鬼瓦

### 三州の瓦産業

三州の粘土瓦の発祥について述べますと、鎌倉時代に渥美半島の伊良湖岬で奈良の東大寺の瓦が焼かれており、室町時代に入り初めて三州瓦の瓦祖とも言われるような人が出たと考えられていますが、史料的に証明されてい



三州瓦本場新川工場地帯

るわけではありません。明和から安永の頃に三州高浜の神谷儀八が、天明の頃に三州棚尾の永坂空兵衛が、京都へ瓦修行に出て後に創業しています。

矢作川の下流から衣浦湾の東南岸が製瓦に適した土地であった理由は、洪積層台地下に瓦に良い粘土が多量に出ること。次に燃料や製品の舟運による遠地輸送ができたこと、そして近世以降の新技術の導入や改良があったことがあげられます。

### 手仕事の瓦づくり

瓦の形になった素地は型にのせ、タタキを入れたり鎌で切ったり、ヘラで裏面をそぎ取ったりして成形します。花瓦や袖瓦を作る場合はこれに剣（唐草）の部分、袖の部分、巴の部分の粘土を取りつけて前述した工程に入ります。この段階の素地を〈アラジ〉と呼び、アラジは3日ほど外で陰干しにされて〈シラジ〉となります。三州と呼ばれる碧南、高浜では昔はいたるところにシラジを陰干しする光景が見られました。雨が降れば協力し合って、大急ぎで瓦を中へ運び込みました。

手仕事の道具は職人の命でした。職人らはヘラひとつで、瓦を作り上げていったと言えます。

### 第一回 伊藤証信翁にまつわる 思い出(座談会)

これは平成十三年三月二十九日(木)に、無我苑研修道場で収録されたものです。

座談会 参加者 岡島 良平 (お)

榊原 純治郎 (さ)

杉浦 元 (す)

(五十音順)

《杉浦元さんはその日、自作の俳句を持って会場に来られる》

(す) 俳句は下手だけれど、書いてきた。

(お) どういう句だ。

(す) 証信さんが夢の中に出てきた。

(さ) 「春眠に笑顔の杖の証師出づ」

(さ) あさ子夫人は絶え間なく笑顔で、

話をされる時も笑顔で、何とも言い

ようがないですな。

(す) (証信さんは)北新川へ行く時はよ

く寄ってくれたけれど、その時はま

だほとんど杖はついていなかった。

杖をつけていたのは、本当の晩年で

した。

(さ) (証信)先生が俳句を作られること

は、あったのですか。

(お) 油ヶ渕の歌を一句作って書いて

頂いた。

(す) 僕は竜灯窟に先生がおいでだった

頃よく行った。そこに杉浦よねさん

がいた頃で、その時分のことば母か

ら聞いたことだけで、全く知らない

が、証信さんが西端においでたのは、

僕が十歳の時だった。

(さ) 原田新治君とは、年はどうですか。

(す) 僕の方がはるかに下です。それで

も今年、誕生日が来ると八十六歳だ。

(さ) 今年が九十七歳。

(お) あんたは明治三十七年生まれか。

(す) だから僕は証信先生とお話するの

は、ずばぬけて良かった。ここにお

集まりの方々の中でも私は最年少だ。

(さ) 今、竜灯団でご存命の方は？

(す) もうね、私の知っている時分の無

我苑関係の人は、全部亡くなっちゃっ

た。おとつい、鳥山貫一君が葬式だ。

鳥山くんは、晩年漢詩をやっておい

でだったね。

(苑長) それでは皆様方、改めまして、

おはようございます。きょうは三名

の方々に、それぞれ伊藤証信さんに

関わりがあったということでお集ま

り頂きました。証信さんの思い出話

を中心に、気楽にして頂けたらと思

います。不慣れですが、大野が進行

役を務めますので、よろしくお願

致します。

(司会) 伊藤証信先生とご自分とのご関

係を話して頂いて、よろしいでしょ

うか。杉浦元さんからお願いいたし

ます。

(す) 私は今年八十六になりますが、証

信さんと直接話をしたとか、もし許

されるなら、弟子の一人だというこ

とであれば、まだその時分は若かつ

たですから、私と同年配の人で私の

ように伊藤先生とご昵懇に願えた

というのは、ほとんど無いと思います。

皆、榊原先生や岡島先生の時分のお

方ばかりだと思えます。で、私の記

憶ですと、大正十四年、伊藤証信先

生が五十歳の時、東京から西端へお

越しになった。しかし、私はそれよ

り前のことは、ほとんど存じており

ません。それから、杉浦民一先生の

前の、竜灯窟という所にお住まいに

なって、そこへ一、二回行ったこと

があります。

どうして証信先生をお呼びしたか

というのと、民一さんのお兄さんとい

う方が、頭のいい人で、人を集めて

指導されたということで、西端の松

下村塾、丁度、吉田松陰(一八三〇

〜五九)が萩でつくったのに例えて

母が話してくれました。それが、竜

灯団、どうして竜灯団というのかと

いうと、あれは、如光さん達が竜灯

をかかげ、連如上人が西端、岡崎、

三河を巡察したということから、竜

灯団、また、竜灯団のお方達は、今

よりしばらく前の西端を、早く言う

と牛耳った人達です。

(さ) まさに「竜灯団」ですな。

(す) 竜灯団の人が東京の中野からね、

伊藤証信さんと呼ばってきて。

(お、さ、す) 安藤現慶さん。

(す) その息子さんが、後にまち子さん

の婿養子になられた安藤現慶さん。

それから時々、まち子さんが見え

なくなったから、まち子さんは、よく

知っていた。

(次号では、中村久子、森信三氏等

登場します。)

## お知らせ

平成十三年度  
後期哲学講座のご案内

### メインテーマ 「集合心性」

11月24日(土)	集合心性序説 一風現象学	京都大学大学院教授 小川 侃 氏
12月 1日(土)	自然と祭 一雰囲気の現象学から	龍谷大学非常勤講師 梶谷真司 氏
12月 8日(土)	人間存在の集合性と個別 性における死の位置づけ	龍谷大学非常勤講師 小関彩子 氏
12月15日(土)	雰囲気と集合心性	京都大学大学院教授 小川 侃 氏

### 平成十三年度 新春特別講演会

講師 梅原 猛氏(哲学たいけん村  
無我苑名誉村長・哲学者)

演題 未定

日時 平成十四年一月二十七日(日)

入場 無料(要 整理券)